

提言

新国 勇



生き物が生息する環境を大別すると、奥山、里地里山、都市、河川、湖沼、湿原、沿岸、海洋、島嶼がある。奥山は天然林が優占し人間の働きかけが小さく自然性の高い山地をいう。里地里山は人間が利用するナラ、クヌギなどの二次林や杉の人工林、水田、畑地、草地在る田園地帯のことだ。ここは人間の働きかけによって多彩な環境が生じ、その分だけ多種多様な動植物が生息しているといわれ

生物多様性の時代①

につく・いさむ 只見の自然に学ぶ会代表。県森林文化に係る調査検討委員。県生物多様性推進協議会委員。只見町職員として町史編さんや世界ブナ・サミットの開催、只見町ブナセンターの開設に携わった後、地域の自然を見直すことによるまちづくりを続けている。

ている。

本県をみると、会津には飯豊山地や越後山脈という奥山をもち、それらを水源とする阿賀川が日本海へと向かう。

河川が太平洋にそそぎ込む。砂浜や海食崖が連続する海岸線、松川浦の汽水域も特徴的だ。これほど多種多様な自然環境を備えた県はまれだと思

さらに猪苗代湖や裏磐梯の湖沼群、国内有数の湿原をもつ尾瀬や駒止湿原がある。中通りでは西に吾妻山の奥山、東に阿武隈高地という里山が広がり、そこから水を集めて阿武隈川が太平洋にそそぐ。浜通りには、阿武隈高地東側のなだらかな山々が南北に延び、ここから多くの

境を備えた県はまれだと思う。その中で、里地里山が生活の変化で急速に失われつつあるため、絶滅しそうな動植物が増えているという。国は里地里山を保全しようと里山イニシアチブのアピールに起だ。しかし、里山を保全することに重きを置きすぎていない

生態系の見本奥山認識を

だろうか。日本人がつくった多様な里地里山環境は、稲作が始まった弥生時代からのことであり、数千年の歴史しかない。この環境が新たな種を生み出し繁栄をもたらしたというわけではない。結果として、さまざまな動植物が安定して生息できる最適な環境ができあがったのである。

いま大切なのは、もともとあった原生的な自然である奥山が、その地域のもっとも普遍的な生態系の見本となつていることを認識することだと思ふ。奥山こそ、立地環境に対応したモザイク構造からなる多様な植生相からできている。そこには天然林が自生し、生態的にもっとも安定した環

境が存在する。奥山の天然林から流れ出た水は、里地里山を潤し海にそそいで沿岸の生き物を養う。奥山の生態系なくして、里地里山、湖沼、沿岸の生物多様性は成立しない。奥山という本来の生態系を失ってしまえば、その地域にあるべき本当の生態系を維持することはできないからである。

本県は、磐梯朝日、尾瀬、日光の三つの国立公園、越後三山只見国定公園、さらに吾妻山周辺、飯豊山周辺、奥会津山地に森林生態系保護地域という奥山をもつ。来年度に向けて生物多様性地域戦略を策定している本県には、生物多様性の原形ともいえる広大な奥山をもつていふということを自任し、他県の模範となる戦略をまとめてもらいたい。